

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	文化重視のドイツ夏季研修：琉球大学の取り組みと学習者への効果
Author(s)	野間, 砂理
Citation	広島ドイツ文学, 29 : 17 - 30
Issue Date	2015-11-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038665
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



文化重視のドイツ夏季研修 —琉球大学の取り組みと学習者への効果—

野間 砂理

1. はじめに

琉球大学では、夏季休暇を利用し、2週間から4週間前後の海外語学・文化研修を英語・中国語・スペイン語・フランス語・ドイツ語圏で隔年実施している。とりわけ法文学部国際言語文化学科ヨーロッパ文化専攻が提供するスペイン語・フランス語・ドイツ語圏の研修では、ヨーロッパの提携大学あるいは語学学校¹において2週間の語学コースを受講後、約2週間に及ぶバスと電車を使った2カ国周遊型の文化研修を実施し、研修最後の4日間は参加学生が個人旅行を計画実施する。他大学で実施されている海外の提携大学における1か月間の語学研修の多くが語学力向上と異文化体験を目的としているのに対し、文化研修に力点を置く本研修は非常に特異であると言える。本論文では、琉球大学において海外文化研修が始動するに至った経緯とこれまでの実績を述べた後、2014年8月から9月に筆者が引率したドイツ語圏語学・文化研修に焦点を絞り、この研修の事前準備として開講された半期の講義と集中講義、²ドイツでの語学・文化研修ならびに研修後の講義を通じた学習支援の効果を考察する。³

2. 海外文化研修発足の経緯と実績

琉球大学における第2外国語の1年次履修者数は平均して、スペイン語500名、ドイツ語250名、フランス語120名程度である。スペイン語履修者が圧倒的に多いのは、沖縄県

¹ スペイン語は2014年度のみ提携校である「スペイン・バルセロナ自治大学」で、ドイツ語は研修開始時から提携校である「ドイツ・デュッセルドルフ大学」で、フランス語はホームステイを重視し、語学学校での語学研修をそれぞれ実施している。

² 半期の講義は2014年度前期全15回、集中講義は2014年3月3日から6日までの3泊4日間、琉球大学が所有する「課外活動施設・奥の山荘」で実施された。現在、西日本で毎夏開催されるインターウニゼミナールは、琉球大学で実施する集中講義が母体となっている。

³ 研修後は、琉球大学理事・監事・語学教員・学生を招いた報告会や、琉球大学学報・語学センターニュース、海外文化研修報告書等でその成果を大学内に公表しているが、他大学教員にも情報提供すべく、本論文を本誌に投稿するものである。

における移民の歴史と少なからず関係があるだろう。石川 (1978)によれば、沖縄県では 1885 年に沖縄県人がハワイへ集団移民として出向したのを皮切りに、メキシコ、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、フィリピンへと出稼ぎ移民が増加していった経緯がある。沖縄県の出移民数は第二次世界大戦前の 1899 年から 1941 年まで 7 万人を数え、この数値は当時の県民 10 人に 1 人が移民であったことを示すものである。こうした特殊な状況により、今日でも海外移民の記事が新聞に掲載され続けている。また国内外で沖縄県人会⁴が 126 も発足しており、現在なお沖縄県と海外移民との関係は深いことが窺える。それ故、沖縄県民の主な移民先である南米、そしてその地域の多くで公用語として用いられているスペイン語に関心が向けられるのはごく自然なことであると言えるだろう。そのため本学のドイツ語教員は、ドイツ語学習者を増やすべく長きに渡り多方面に努力してきた。その取り組みが、毎年 3 月に実施される海外文化研修の準備講座(集中講義)であり、やがて全学に波及することになった文化重視の海外研修である。

本研修は、2004 年度から隔年で実施され、既に 6 回の実績がある。海外の提携校あるいは語学学校における 2 週間の語学研修と 2 週間弱の文化研修、さらには 4 日間の個人旅行を行うもので、法文学部国際言語文化学科ヨーロッパ文化専攻生はもちろん、ドイツ語を 1 年半以上履修した学生を対象に全学部・全学科に開かれたプログラムである。これまでの研修では、日本から参加する学生および現地で長期留学中の学生数名が語学研修後の文化研修に合流しており、全体で 20 名前後の学生を 1 名ないし 2 名の教員が引率した。

文化研修では毎回テーマを決め、参加学生は研修前に開講される半年間の講義を通して十分な事前準備が義務付けられる。⁵ 2012 年度のテーマは「戦争と平和」であり、歴史学専門の教員によって旧東西ドイツと第三帝国についての知識を身に付け、アウシュビッツ強制収容所跡、Helmstedt の壁博物館、Berlin のシュタージ博物館やホロコースト記念碑を見学した。通常は各言語コースが個別に研修を実施しているが、2006 年度には「EU 研修」と銘打って、英・独・仏・西の 4 言語合同海外文化研修を行ったこともある。各グループはイギリス・ドイツ・フランス・スペインで 2 週間の語学研修に参加した後、ブリュッセルに集合し、欧州連合日本代表部との連携で、ブリュッセルとストラスブールの EU 機関を訪問し、欧州議会議員の講演を傾聴するなどした。これまでの文化研修に対する参加学生の満足度は非常に高いだけでなく、文化研修には内容に応じて他専攻の教員が同行することもある。今後も個人旅行では得難い貴重な体験を提供するものとして、文化プログラムを維持・発展させていくべきであると考えられる。

⁴ 国内外の沖縄県人会に関する情報は沖縄県の公式ホームページに掲載されている。
(<http://www.pref.okinawa.lg.jp/site/chijiko/kohokoryu/honka/kenjinkai.html>)

⁵ 当該講義はドイツ語圏海外文化研修に参加する学生を対象とするが、語学・文化研修に参加できない学生も多数履修し、定員充足率の極めて高い講義である。

3. ドイツ語圏語学・文化研修の概要

本研修では、研修前に学習したドイツ語を現地で実践・運用するだけでなく、様々な価値観や考え方に対し柔軟に対応できる人材を養成し、「環境保全」、「自由貿易」、「平和の構築」といった現代の我々が直面している種々の問題を国際的な視野で分析・解決できる能力をドイツやヨーロッパの文化や歴史への理解を通して養成することが目的である。また、参加学生が研修全体を通して、日常生活や大学での講義では十分な取り組みが出来ていないとは言い難い、自己管理能力や問題解決能力を身につけることもまた求められる。以下では、琉球大学での事前準備と講義、ドイツの提携校における語学研修、バスによる2カ国周遊型文化研修の3つに分けて、ドイツ言語文化コースの取り組みを詳述したい。

琉球大学での事前準備と講義

琉球大学では、海外研修への参加の有無を問わず、全学生が各専攻で定められた規定に従い第2外国語を履修しなければならない。従って、全学生は2年次進級時点で、(1a)の条件を満たすことができる。

(1) 研修前の科目履修

- 研修に参加するために必要な科目
 - a. 「ドイツ語入門 I, II」または「インテンシブ・ドイツ語 I, II」
 - b. 「ドイツ語実践研修(集中講義)」, 「ドイツ語圏文化入門」
- 2・3年次に履修することが望ましいドイツ語専門科目
 - c. 「初級ドイツ語文法 I, II」, 「ドイツ語会話 I, II」, 「ドイツ表現演習 I, II」等

当該研修が開催される年度の前期に開講される「ドイツ語圏文化入門」では、全15回の講義をドイツ語教員がオムニバス形式で提供している。2014年度は文化研修地域(フランケン地方)と研修テーマ「生活と仕事、今と昔」に合致した、フランケン地方の文化紹介・マイスター制度、旧東ドイツの生活状況、就業生活と移民問題等の講義が提供された。履修学生は15のテーマから2つを選択し、それぞれ3000字以上のレポート⁶を講義担当者に提出することで、文化研修で訪れる地域の文化的背景・歴史等を事前学習する。しかしながら、研修後のアンケートでは、実際に文化研修で得る情報量があまりに多かったため、訪問都市と訪問施設を事前にプログラム⁷で入念に確認し、自分自身で十分な予備知識を蓄えておくことの重要性を痛感したとの意見が少なくなかった。従って今後は、参加学生がペアになり、訪問都市一つとその都市の歴史や基礎データ、博物館や歴史的建造物を予め調査させ、調査結果を参加者に現地で説明させるという方法で、この問題は改善するのではない

⁶ 講義担当教員により、枚数・執筆言語等のレポート作成条件は異なる。

⁷ 本論文 21 頁(2f)および 22-23 頁(3f)を参照。

かと考える。

(1b)に挙げた「ドイツ語実践研修」は毎年3月に開講される3泊4日のドイツ語合宿である。4日間行われるドイツ語の講義は、7名前後の少人数制で、特定のテーマに関する情報収集と討論を中心に、可能な限りドイツ語で進められる。当該集中講義は、第一にドイツでの語学研修に備え、ドイツ語力が不十分であっても臆せずドイツ語を使うことに慣れ、それによって外国語を使う楽しさを体感するためであり、第二にドイツ語学習者同士そして学習者と教員間の関係を密にし、ドイツでの研修準備のみならず、長期的にドイツ語学習者の支援をするためでもある。当該集中講義の参加者は、2~4年次でもドイツ語の専門講義を継続履修したり、ドイツ語学・文化研修に参加したのを機に、ドイツへの長期留学をしたり、他学部あるいは他専攻から転科したりする者もあり、⁸ その効果は顕著である。(1c)の「ドイツ表現演習」では、スカイプを使い、提携校であるドイツ・デュッセルドルフ大学の日本語学科に所属するドイツ人大学生と毎週1時間半の時間を各自で設け、自分が定める特定のテーマについてドイツ語と日本語を交え会話するというものである。学生はドイツ語で思うように会話ができないことで、研修への不安感を募らせているようだが、ドイツでの研修前にドイツ人の友人を持つことで、書物等には書いていない生きた情報が得られ、学生自身がドイツへ行く楽しみが一つ増えることは非常に有益であると考えられる。また、ドイツ到着後は彼らが現地チューターとなり、相互に密度の濃い交流を進めることが可能である。しかし、他専攻の学生は2年次から専門教育が始まるため、研修前に(1c)の科目を履修できないことが多いため、研修中に養ったドイツ語力を維持向上させる目的で、研修後に履修する学生も少なくない。⁹

以上のように、ドイツ言語文化コースでは、隔年実施の海外語学・文化研修の準備を文化体験と会話重視の講義によって支援している。このシステムで問題となるのは、やはり教員の研究時間を確保することが隔年で困難なこと、そして琉球大学卒業後に大学院に進学する学生が、文化に特化した講義によって文学や言語学の十分な知識を得られていない現状が挙げられる。しかし、本学外国語センターを中心に、中・英・独・仏・西の言語グループの教員による海外文化研修委員会がすでに立ち上げられており、全学的な研修としての内容改善と充実、さらには教員の負担軽減について定期的に協議されており、今後改善の余地が十分にあるだろう。

ドイツの提携校における語学研修

以下では、ドイツ・デュッセルドルフ大学における語学研修とその期間に実施される文化研修の梗概を述べる。

⁸ 2015年度は2名、2014年度は1名、2013年度は2名が転科した。

⁹ 2014年度の夏季研修後、他専攻の学生でドイツ語専門科目を履修していないのは、9名中2名のみである。

(2) 2週間の語学研修 (2014年度夏季研修)

- a. 参加人数 教員 2名 琉球大学生 13名 その他 3名 (計 18名)
- b. 参加者内訳 法文学部国際言語文化学科ヨーロッパ文化専攻 4名, 英語文化専攻 2名
人間科学科 4名, 総合社会システム学科 1名, 農学部 1名
人文社会科学研究科 1名
- c. 期間 2014年 8月 18日(月)–2014年 8月 29日(金)
- d. 研修機関 ドイツ・デュッセルドルフ大学
- e. 参加費 207,300円 (渡航費) + 67,700円 (語学研修費¹⁰) = 275,000円
- f. 語学研修中の語学・文化プログラム¹¹

日程	語学研修	文化研修	
		訪問地	研修内容
8/18(月)	レベル分けテスト	Düsseldorf	
8/19(火)	授業(午前)	Düsseldorf	Düsseldorf 大学日本語学科の学生と交流会
8/20(水)	〃	Aachen	市内観光
8/22(金)	〃	Neuss	Haribo 工場見学
8/24(日)	〃	Xanten	考古学博物館見学, 市内観光, オペラ「魔笛」観賞
8/27(水)	〃	Köln	チョコレート博物館見学, 市内観光
8/28(木)	〃	Neanderthal	ネアンデルタール博物館見学

上記の研修内容からも分かるように、参加学生は午前中に大学での語学講座を受講し、2日に1度は午後の文化研修に参加しなければならない。午前中3時間、計10日間の語学講座で何が習得できるのか。この問いは研修前からしばしば参加学生の不安の声として教員に届けられる。確かに前述の通り、この研修全体の目的の一つはこれまで学んできたドイツ語の実践と運用、さらには語学力向上にあるが、研修後のアンケート調査によると、二種類の解答が特に目立つ。一つはドイツ言語文化コースの学生が自身のドイツ語力の無さを痛感したという否定的意見、もう一つは他専攻生が渡独前には出来なかったレストランでの注文、クラスメートとのドイツ語会話、道を尋ねたり買い物をするといった簡単な日常会話ができるようになったこと、またドイツ語のみの授業を何とか理解できたことに語学力の向上を感じるといった肯定的意見である。両者の捉え方の違いは、これまでのドイツ語学習歴の違いに起因する自身への期待度に依拠するだろう。

¹⁰ 2週間の語学研修費には、この2週間に必要な食費以外の全ての経費(語学講座代、当該期間に開催される文化プログラム費用、交通費、宿泊費)が含まれる。

¹¹ 文化プログラムのない日については記載なし (8/15-17, 21, 23, 25, 26, 29)。

語学研修中にも幾つかの文化研修プログラムが組まれている。当プログラムは、研修前に数回開催されるオリエンテーションで個人々の要望を聞き、できる限りプログラムに組み入れるように努めている。2014年度は芸術に興味のある学生4名のために、オペラ「魔笛」を観賞したり、地理歴史人類学専攻から参加した学生1名に配慮し、かつて古代ローマ帝国の軍営都市として栄え、現在ではその遺跡が発掘・復元されている Xanten, そしてネアンデルタール人類の化石が発見され、世界で初めて科学調査の対象となった Neanderthal の考古学博物館を見学した。上記プログラム以外でも、世界的に著名な建築家達が手掛けた建造物が並ぶメディエンハーフェンやライントワー（電波塔）、そしてサッカースタジアムを見学したり、近郊の街並みを散策するなど、2日に一度は非公式プログラムが教員と学生によって準備されていた。ただし、スケジュールがあまりに盛り沢山で、準備する教員も参加する学生も時間的・精神的な余裕がなかったことは問題である。また、学生にある程度の自由時間を与えることで、自主性を重んじ、それぞれが苦労しながらも公共交通機関を利用して目的地に辿り着き、目当ての施設を見学することで、様々な場面に対応できる問題解決能力、日本とは異なる社会習慣や考え方に適応する柔軟性を養うことの方が重要ではないかと筆者は考える。

上記の通り、研修の前半部分を占める語学研修では、外国語の運用能力の向上を図り、現地学生・市民との交流を試みる一方、後半の文化研修では、毎回異なるテーマを設定し、そのテーマに沿って訪問国・地域の文化や歴史に対する理解を深め、帰国後の学習がより深化・発展するような文化研修を目指している。

バスによる2カ国周遊型文化研修

以下では、10日間のバス¹²による2カ国周遊型文化研修および個人旅行の概要を述べる。

(3) 文化研修

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| a. 参加人数 | 教員3名 琉球大学生15名 その他4名 (計22名) |
| b. 文化研修期間 | 2014年8月30日(土)–2014年9月9日(火) |
| c. テーマ | 生活と仕事、今と昔 |
| d. 参加費 ¹³ | 99,000円 |
| e. 個人旅行期間 | 2014年9月10日(水)–2014年9月14日(日) |
| f. 文化研修プログラム ¹⁴ | |

¹² 2014年度の文化研修も、この研修が始まって以来、懇意にしている個人経営の Fridolin というバス会社を利用した (<http://www.fridolin.com/>)。費用は10日間、50人乗りの大型バスを貸し切って 5,900 Euro。

¹³ 文化研修期間の宿泊費（ユースホステルでは夕食と朝食代込み）・各種文化施設入館料・交通費が含まれる。なお、文化研修のみに参加する者は各自で往復航空券を手配するため、参加費に渡航費は含まれない。また、4日間の個人旅行の費用も各自が負担する。

日程	訪問地	文化研修プログラム
8/30	Mönchsonderheim Iphofen	市内観光 市内観光 (クイズあり), #*ワイナリーツアー
8/31	Würzburg Würzburger Stein, Karlsstadt 等	#市内観光 (マリエンベルク要塞, 司教館) #バスツアー
9/1	Haßfurt, Königsberg Bamberg	#バスツアー #*市内観光
9/2	Fränkische Schweiz Walberla Forchheim Effeltrich	バスツアー #*散歩 市内観光 市内観光
9/3	Bayreuth	マイスターのもとで職業体験
9/4	Vierzehnheiligen Bayreuth	教会見学 20 の博物館を各自興味に応じて見学
9/5	Mödlareuth Eger	#*博物館と旧東西ドイツの壁見学 #バスツアー
9/6	Marienbad (チェコ) Karlsbad (チェコ)	#市内観光 #市内観光
9/7	Nürnberg	#市内観光, 博物館見学
9/8	Nürnberg	#*博物館見学 (ドク・ツェントルム, ニュルンベルク・ フルト裁判所)
9/9	Forchheim Erlangen	#*SIEMENS 工場見学 #*SIEMENS 社ヘルスケアソリューション部門にてワー ク・ライフ・バランスについての講演会, 博物館見学
9/10-13	Erlangen Frankfurt	個人旅行 (13 日 18 時に Frankfurt 集合) 13 日: 個人旅行報告会
9/14	Frankfurt	帰国

上記研修地とその内容が示す通り、10 日間で自由時間は皆無に近く、参加者は食事と就寝時間を除いて団体行動を強いられるため、心的負担も大きい。しかし、そうしたストレス

¹⁴ 文化研修プログラムに記載されている「#」の表記はドイツ語・英語・日本語のいずれかによるガイドを意味し、「*」の表記は引率教員による日本語通訳を意味する。

を訴える時間もないくらい目まぐるしく小さな町や都市をバスで巡回するのがこの研修の特長でもある。文化研修中に見学する博物館や市内観光では可能な限り現地のガイドによる説明を受け、引率教員 2 名が通訳するため、参加学生はその内容を容易に理解できる。その分、新たに得る情報量は学生自身が処理できないほど膨大であるため、次節でも述べるが、研修後の講義に連係し、フォローアップにも役立てている。前述の通り、研修後のアンケート調査では、多くの学生が「訪問都市と訪問施設について調査し、予め十分な知識を蓄えておくことが重要であると痛感した」や、「先生が全部してくれたので、何もしなくて良かった」と述べている。そこで考えられるのは、「ドイツ語圏文化入門」の講義を通して、各自がいくつかの都市と見学予定の施設について調べ発表する時間を設け、現地でガイドとして案内するというやり方である。それによって、教員が一方向的に知識や情報を与えるのではなく、学生自らが主体となる文化研修になることが期待できると考える。教員による通訳についても、常にそれが必要ではなく、理解しようとする姿勢や、不明な点を直接ガイドに質問する積極性と語学運用能力、またそこから生じる知的探求心を帰国後の勉学に生かすこともできるだろう。それは決して教員の手抜きではなく、学生の自立学習を促すと筆者は考えるからである。

職業体験と SIEMENS 社見学

以下では、2014 年度の文化研修のテーマ「生活と仕事、今と昔」に即した二つの文化プログラムを取り上げる。一つ目は 2014 年 9 月 3 日に実施したマイスターの元での職業体験である。2~3 人のチームを組んだ学生は、早朝からバイロイト市内にある肉屋・パン屋・ビール工場・美容院・レンガ屋へ向かい、そこでマイスターによる仕事の説明、仕事体験、仕事に対する姿勢、マイスターの仕事と管理運営業務、仕事と休暇のバランスなどを学んだ。¹⁵ビール工場で修業した学生は、専ら工場見学とそこで作られる各種ビールを試飲し、お土産にビールセットを頂いたようだ。美容院に出向いた学生 2 人は、接客などはせずお互いの髪にカールを巻いたり、人形相手にパーマをかけたりして、マイスターの指導を直接受けることができたようだ。このことは地方紙にも写真付きで取り上げられていた。肉屋とパン屋で修業した学生は B1 レベル¹⁶のドイツ語力を有していたため、マイスターの説明を理解しただけではなく、日頃から関心を持っていたドイツ人の仕事観についての質問をすることができ、1 か月の語学研修や旅行会社が提供するような海外旅行では決して体験できない 1 日職業体験に手応えを感じていた。それに対し、不本意にもレンガ屋に派遣された女子学生 2 名は、他のドイツ人男性作業員と共に重いレンガをひたすら運ぶ作業を手伝わされ、翌日から筋肉痛と腰痛で歩けない状態になっていた。教員は学生の性別・体型・体力などを考慮し、人員と職種の割り振りが必要だということを痛感した。とりわけ重労働

¹⁵ 煙突屋も候補にあったが、希望者がいなかったため、派遣は見送った。

¹⁶ 言語レベルはヨーロッパ言語共通参照枠の基準に基づく。

働を伴う職業体験における配慮が不可欠である。文化研修後のアンケートでは、職場のチームワークに感銘を受けたとする記述が多かった。職場では仕事内容に関する会話はあまり聞かれなかったものの、日常会話を楽しみながら非常に円満な雰囲気で作業が進められていく様子を目の当たりにし、ドイツ人が他者とのコミュニケーションを尊ぶことを身を持って感じ取ることができたようだ。また、各人が決められた仕事を黙々とこなすのではなく、その日にすべき職務をチームで手際良くこなし、皆が一斉に残業することなく定時に切り上げ、家族との時間を大切にしている様子に共感を覚えたようだ。

文化研修のテーマに即した二つ目のプログラムは世界的大企業である **SIEMENS** 社の見学である。以下、Forchheim と Erlangen における 1 日見学の内容の素描である。

- (4) 10:00-12:00 Forchheim にて **SIEMENS** 社の概要説明と工場見学
- 12:00-13:00 Forchheim の社員食堂で昼食後、Erlangen に移動。
- 13:30-15:00 Erlangen ヘルスケア部門において女性社員によるワーク・ライフ・バランスについての講演会と Erlangen ヘルスケア部門の製品説明
- 15:00-16:00 **SIEMENS** メディカルテクノロジー博物館見学

まず、Forchheim の非常に清潔かつ現代的な工場で、Erlangen に拠点を置く **SIEMENS** 社ヘルスケア部門副社長による **SIEMENS** 社全体の概要、例えば主要製品、ドイツおよび世界の本社・支社・工場、売上高、環境への取り組みなどの説明がなされた。次に、日本各地の病院にも納入されている MRI が製造されている工場を見学し、その製造過程と納入後のメンテナンスに関する社員の説明を受けた。その後、Forchheim の社員食堂でとても美味しく健康的な昼食をご馳走になった後、Erlangen ヘルスケア部門において女性社員によるワーク・ライフ・バランス¹⁷⁾についての講演を聞いた。¹⁸⁾ この講演は、研修に参加した人文社会

¹⁷⁾ ワーク・ライフ・バランスとは、「誰もがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たす一方で、子育て・介護の時間や、家庭、地域、自己啓発等にかかる個人の時間を持てる健康で豊かな生活ができるよう、社会全体で仕事と生活の双方の調和の実現を希求する」ことを指す。(内閣府・仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章参照：http://www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html)

¹⁸⁾ ドイツ人と言えば、職場から与えられた有給休暇を消化し、家族との時間や長期休暇を重んじることから、筆者は労働に対する考え方そのものが日本とは一線を画する印象を持っていたが、本講演では意外にも、そのような印象が覆されるものだった。例えば **SIEMENS** 社では、就労者が定められた就業時間を守りながらも自由に出退勤時間を設定できるフレックスタイム制度を導入している。また、2014年10月時点ではドイツ全土に30か所・1600人の子供を受け入れることができる保育施設が設置されていたが、2015年末までにその数を2000人分まで増やすことを目標としている。さらに驚くべきことに、就労場所を支障の無い範囲で就労者が選択することもできる。これは育児中の女性の就労を促すとともに、男性も仕事一辺倒ではなく育児に参加できるよう配慮した制度である。このように自身の人生設計に合わせた働き方を自由に選択できる取り組みは評価されるべきであろうが、筆者は世界的な大企業で、これらの制度を遠慮なしに活用する環境と出

科学研究科に所属する社会学専門の院生の要望により実現したものである。講演後は Erlangen ヘルスケア部門の 1 階にある最新型 MRI と補聴器の説明を受け、社屋に隣接するメディカルテクノロジー博物館を見学した。そこには SIEMENS 社ヘルスケア部門が 160 年以上にわたり世界の医療技術をリードしてきた X 線装置と MRI システムにおける発展の歴史が、X 線による健康被害という負の歴史の写真と共に展示されていた。その写真は広島原爆資料館に展示されている軽度の皮膚紅斑を彷彿とさせるもので、その写真からは、医療技術の開発は人体への弊害が伴うものであったことを再確認し遺憾に思うと同時に、自社の博物館において、これまでの輝かしい成果と共に人体への健康被害を報告するという姿勢にある種の感銘を受けるものであった。

SIEMENS 社の見学および Bayreuth での職業体験を経て、学生は自身の将来に真摯に向き合う機会を得ることができ、この文化研修のテーマである「生活と仕事」の意義は十分達成できたと言えるだろう。学生は、長時間労働や自由時間の制約、厳しい人間関係など、これまで漠然と日本での仕事に対するイメージを持っていたようだが、ドイツで大企業と小規模事業所での研修を経て、自分自身が輝ける職種を見つけ出し、どのような就労条件で働くことが今後の社会生活および私生活において重要なのかを就職活動が始まるまでに考え抜いておくことの重要性を認識できたようである。実際に帰国後も、自身に合った職種・企業探しに奔走したり、考えあぐねている姿を見ると、より一層この文化研修が夏休みの思い出に留まらず、学生の価値観や研修後の取り組みに多大な影響を与えることに、引率教員としての責任と喜びを感じる次第である。

個人旅行

SIEMENS 社での 1 日研修の後、参加学生は各々の計画に従いヨーロッパ各地へと 4 日間の個人旅行に出掛けた。全ての旅程は個人の裁量に任せているが、安全面に十分配慮し、実際には渡独前に教員が全学生と面談し、インターネット上でドイツ鉄道の前売り切符の購入、ホテルの予約等を手伝わなければならない。渡独後 1 か月で漸く独り立ちを経験し、旅から戻ってきた学生からは一様にして、自身のドイツ語が通じたことに対する喜びや、公共交通機関を使って目的地へ辿り着き、集合場所であるフランクフルトまで戻って来られたという自負が感じられた。研修中は教員による手厚い保護があるため、たった 4 日間の個人旅行でも学生は予期せぬ事故や語学面での不安を拭い去ることはできないだろうが、精神面での成長を感じ取ることができるので、今後も是非継続したいプログラムである。

世に影響しない会社の風土を構築するまでにはもう少し時間がかかるのだろうという印象を持った。それは決して年功序列ではなく、アメリカ型の能力主義のように受け取れたからである。それに対し、参加学生は日本とは対極にある就業生活にある種の憧れを抱いていたようだ。

奨学金(補助金)と単位認定に係る評価方法

法文学部国際言語文化学科ヨーロッパ文化専攻が提供する海外文化研修に対しては、学内でもすでに一定の評価を得ており、先述の通り海外文化研修委員会が発足し、全学的な研修として内容改善と充実が協議されている。その成果は例えば、大学内の経済支援によって窺い知ることができる。引率教員は琉球大学後援財団から10万円、ヨーロッパ文化専攻から10万円、外国語センターから25万円の計45万円の補助金が出張費として支払われている(教員の研修参加費は43万4千円)。参加学生も、外国語センターから1言語グループにつき45万円の給付型奨学金を得る他、2014年度は日本学生支援機構の奨学金総額80万円を獲得することもできた。¹⁹ 今後も学内外で研修の梗概と成果を公表し、この研修に対し継続的な経済支援と理解を求めていくつもりである。

大学および日本学生支援機構から得られた奨学金125万円は一旦教員が集金し、研修後に学生へ再配分される。一人当たりの配分額は単に総額を参加学生数で除するのではなく、当該研修には4単位が付与されるため、評価に応じて支給される。その評価方法は、研修前後における語学力の伸び率を客観的に計測することは困難なため、2014年度は提携校における語学コースレベル、研修前の各種書類の提出状況、研修中の参加態度、研修後のレポート(日本語3枚とドイツ語1枚あるいはドイツ語3枚)を点数化し、本学が定める評定に換算しAからDの4段階で評価するというものである。その評価に基づき、評価毎に1万円程度の差をつけ再配分した。このことは研修前のオリエンテーションで参加学生に説明されたため、参加学生は想像以上に成績と奨学金に対し敏感となり、結果として研修期間中の集合時間厳守・危機管理・適切な集団行動に繋がり、思わぬ副次的効果を生み出した。

以上、本節では語学・文化研修の事前準備に係る講義、ドイツの提携校における語学研修、バスによる2カ国周遊型文化研修と個人旅行について、ドイツ言語文化コースの取り組みを紹介し、その効果と今後の課題を提示した。以下では帰国後の学生がモチベーションを保ちながらドイツ語やドイツ文化を学習し続けるための支援について述べたい。

4. 成果検証と研修後のフォローアップ

日本学生支援機構は奨学金受給校に対し、研修前後における参加学生の成果検証、研修参加学生と不参加学生の比較調査と報告を義務付けている。しかし、本研修は全学に開かれているため、語学水準とその他の到達目標は参加者別に大きく異なっている。ドイツ言語文化コースに所属する学生は、ドイツ語力の向上を本研修の目的とする者が多かったが、他専攻の学生は異文化体験を掲げる者が多かった。従って本研修前後の語学力を試験等で

¹⁹ 13名分の奨学金を獲得していたが、3名が日本学生支援機構の求める奨学金支給者の資格及び要件(家計と成績)を満たさず、最終的には10名が奨学金を受給した(一人当たり8万円)。

比較測定し、語学面での成果を検証することはせず、学生が自身の語学力の問題点あるいは伸ばしたい点を認識し、それを今後どのように克服するかを考え、新たな目標を設定するよう指導している。ドイツ言語文化コースの学生は概して長期留学のための文法・会話・読解力の向上を望むことが多いため、毎学期開講している講義の履修を促すとともに、文化研修で訪問した都市や博物館等に関するテキストを題材にすることで、研修で得た見聞を定着させ、さらに深めることが出来るよう配慮している。このことは研修後も継続して自身の文化的な関心・知識を深めていくことを希望する他専攻の学生にとっても有意義である。また、ドイツの大学院進学を希望する学生には TestDaF の試験対策講座を開講し、専門的な論文の読解を目指す学生には授業外で時間を個別に取り、内容を発表させ討論することで対応している。個別指導には時間と労力を要する上、年間を通して文化偏重の講義のみを全学生に提供することが望ましいとは到底思えない。実際に、ドイツ言語学およびドイツ文学分野での大学院進学を志す学生も複数名おり、比較的習得に時間を要する高度な専門教育に対しても、学生側からの十全な対策が求められている。従って今後は、研修前の事前準備と研修後の学習支援を効率化すると同時に、現況よりも学生の自主性を重んじる形にシフトしていくことが望まれる。

5. まとめ

本論文では、琉球大学においてドイツ言語文化コースが文化重視の夏季海外文化研修を考案するに至った経緯を沖縄の移民の歴史から紐解き、2004 年度以降の主要実績を概観した後、2014 年度の研修を中心に実績の紹介、評価、考察を行った。当該研修は、ドイツの提携校における語学研修、バスによる文化研修と個人旅行で構成されるが、文化に関する研修前の事前準備講座および集中講義、さらには研修後の講義によって文化と歴史の学習と理解を促し、それによって種々の問題を国際的な視野で分析・解決できる能力の養成を重視している。確かに、琉球大学では多くの学生が異文化の理解に関心を寄せており、研修および関連科目における学生の満足度も高く、2014 年度は「生活と仕事、今と昔」を文化研修テーマに掲げ、SIEMENS 社見学およびマイスターの元で職業実習できたことで参加学生の今後の進路選択に好ましい効果を与えたと言える。しかし、当該研修開催年度におけるドイツ言語文化コースの講義編成は、文化を重視するあまり、ドイツ語学・ドイツ文学・ドイツ語教育学等の専門性が不足しており、これらの専門分野に関心を寄せる学生や、大学院への進学を目指す学生のレベルに相当する教育上の配慮もまた必要であると言える。

参考文献

- 石川友紀 (1978) 「沖縄県における出移民の特色—第2次世界大戦前を中心として—」 琉球大学法文学部紀要『史学・地理学』第21号別刷
- 平高史也 (2003) 「日本におけるドイツ語教育の座標軸を考える—ゴールから決めるスタートとプロセス(Überlegungen zur Positionierung des DaF-Unterrichts in der japanischen Gesellschaft- Zielvorstellung als usgangspunkt)」
- 廣森友人 (2006) 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 多賀出版.
- 藤原三枝子 (2010) 「大学における「基礎ドイツ語」の学習動機に関する量的研究 ～学習開始動機, 外国語学習に対する心理的欲求の充足および動機づけの内発性・外発性に関する調査～」『言語と文化』14巻. 81-113頁.
- 藤原三枝子 (2010) 「大学におけるドイツ語の学習開始動機に関する量的研究 —ドイツ語の学習理由, 学習理由と授業内容への期待との関係性—」日本独文学会ドイツ語教育部会『ドイツ語教育』15号. 4-19頁.
- Frank Mielke, Vincenzo Spagnolo, Weber Till (2002). „Zur Effektivität von Sommersprachkursen in Deutschland.“ In: Deutschunterricht in Japan. S. 18-32.
- Opielka M (2002) „Familie und Beruf. Eine deutsche Geschichte.“ In: Aus Politik und Zeitgeschichte (B22-23).
- Weber Till (2013). „The RyuDai Department’s Kaigai Bunka Kenshu Programme -A Review after ten Years-“ In: Ryudai Review of Euro-American Studies. No. 57, S. 81-94.

Kulturorientierte Sommerkurse in Deutschland

—Der Sommerkursaufbau durch die Universität Ryukyu und seine Ergebnisse—

Sari NOMA

Warum von der deutschen Abteilung der Universität Ryukyu an Kultur orientierte Sommerkurse in Deutschland für japanische Studenten begründet wurden, wird in diesem Aufsatz hinsichtlich der Geschichte der Auswanderung in Okinawa thematisiert. Es werden in erster Linie Erfahrungen seit dem Jahr 2004 angeführt. Der einmonatige Sommerkurs in Deutschland setzt sich aus einem Sprachkurs an der Universität Düsseldorf, einer kulturorientierten Busreise sowie einer individuellen Reise zusammen. Den Teilnehmern werden deutsche Kultur und Geschichte durch kulturbezogene Vorlesungen vor/nach dem Sommerkurs sowie durch eine viertägige Blockveranstaltung nähergebracht, sodass die Teilnehmer die Fähigkeit entwickeln, verschiedene Probleme aus internationaler Sicht zu analysieren bzw. zu lösen. Da viele Studierende Interesse an der deutschen sowie europäischen Kultur haben, bewerteten sie den Sommerkurs und die darauf bezogenen kulturorientierten Vorlesungen als sehr sinnvoll. Darüber hinaus wurde durch das bei der kulturellen Busreise im Jahr 2014 aufgeworfene Thema „Leben und Arbeiten, damals und jetzt“, das Praktikum in einem Meisterbetrieb und den Besuch bei Siemens, einer der größten Firmen Deutschlands, ein positiver Einfluss auf ihre eigenen künftigen Lebens- sowie Arbeitsrichtungen ausgeübt. Aber der Sommerkurs und die Organisation der darauf bezogenen Vorlesungen in der deutschen Abteilung fokussieren stark auf die deutsche sowie europäische Kultur, sodass bisher nicht ausreichende Fachvorlesungen wie deutsche Linguistik und Literatur oder Didaktik für Deutsch als Fremdsprache angeboten werden können. Jedoch müssen wir für Studierende, die sich für die betreffenden fachlichen Bereiche interessieren und später einen Magisterkurs belegen wollen, vor allem das Angebot der nicht kulturorientierten Vorlesungen berücksichtigen.